中国で最も知名度が高い日本人俳優の矢野浩二は、善良な日本人留学生から残虐な日本人軍人、頭の切れる日本人ビジネスマン、正義の日本人スパイなどを演じただけでなく、過去に何度か世論の重圧にさらされている。

そんな彼が中国語で執筆した初の自伝「夢さえあれば遥かな道のりも怖くない」が出版された。彼はかつて居酒屋のバーテンダーで、夢を求めて東京に行き、芸能人の付き人からエキストラ俳優となり、さらには中国語が一言も話せない北漂（北京に出てきて奮闘する地方出身者）に、そしてスターになり、バラエティ番組の司会者となるまでの波乱に満ちた経験が紹介されている。また中国と日本の民族的な性格に対する彼なりの分析や教育理念への見解、中日文化に対する思いなどが語られている。

この本の編集担当者は「浩二の文章にはほとんど修飾的な編集を加えていないため、読者にとって巧みな、美しい文章とは感じられないかもしれないし、表現方法も一部硬かったり、スムーズでないかもしれない。ただこれが彼の真の姿であり、中国を15年間漂泊した日本人俳優の心の底から発せられたリアルな情感なのだ」とした。

「有夢不怕路遠」の中で、浩二は「人生には準備された乗り越えなければならない多くの舞台がある。そして、僕は森田さんの付き人から始まり、中国で仕事のない日々に耐え、自分の心をすり減らしながら鬼子（日本兵に対する蔑称）を演じ続けた」。その後はバラエティ番組の中でうまく自分を表現できずに落ち込み、失言から困難に陥った。一つの舞台を越えてもすぐに別の困難が僕の前に立ちふさがった。そのたびに苦悩し、涙を流しながら、それでも色々考えて前に進み続けた。そうして今日の僕がある。このように舞台を乗り越えて前に進み続けることこそ人生である。完璧な演技というものがないように、人生もこうやって続いていくのだ」と記している。